

たまい場つうしん 第5号

— 大人も子どもも気軽に立ち寄ってお茶のみ話に花が咲く、そんな地域の公民館をめざして名づけました —

遅ればせながら

新年あけましておめでとうございます

昨年中は、福生市の公民館活動に御協力を賜り誠にありがとうございました。
本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

白梅分館職員一同

しめ飾りの下に、今年の干支である寅の置物が沢山飾ってあります。これは、「熟陶会」（陶芸サークル）の森田芳伸さんの作品です。毎年、その歳の干支をこうして飾るようになってから三年目に入りました。これからも楽しみです。白梅会館正面玄関に向かって右側の二重窓の中に、年中無休で展示していますので、是非一度のぞいてみてください。



このしめ飾りは、昨年末に実施した白梅分館主催事業「福生ちいきの食育講座」親子・子どものお飾り教室』の中で、館長の小山が作ったものです。

この事業は、昨年十二月二十三日（祝）に、親子十九人が参加して行われました。地元の森屋さんに手ほどきをお願いし、以前館長だった浜野さんはアシスタントとして参加しました。

稲わらをたたいた時にくずが飛び散るので、白梅会館の裏の運動場で実施しました。当日は風も無く穏やかな「お飾りづくり日和」(笑)でした。

材料の稲わらは、市内に残り少なくなった稲作農家と近隣の農家から譲っていただきました。橙(だいだい)と譲葉(ゆずりは)は、熊川地域の方々からいただきました。また、水引は参加者から提供されました。ほとんどの参加者にとって、稲わらにさわることは初めての体験だったようです。縄をよる作業も、始めのうちは難しそうでしたが、段々コツが解ってくる、次々と太くて立派な輪飾りが完成し、あちらこちらで自慢気な笑顔がこぼれるようになりました。

当初はどうなることやらと心配もありましたが、何とか形になりました。それぞれが持参した飾りも一緒につけて、「世界に一つだけのお飾り」ができました。

出来上がったお飾りを手に記念撮影

終了後のアンケートの中の、「いつまでも自然が残る市でありますように望みます。」という言葉が、とても印象的でした。

先人の知恵に学び、地域に残る慣わしの伝承を目的に、「食育講座」を四年に亘り実施してきました。運動場に置いたカマドに大鍋をかけて薪で湯を沸かし、ゆでまんじゅうを作る体験、原ヶ谷戸の農地での麦ふみ・麦刈りなどの農業体験、どれも親子で参加するところがねらいです。

これからもさらに経験を重ねて、充実した内容を目指しますので御協力をお願いします。

現在のところ、白梅分館には五十のサークルがあり、延べ約六百人が活動しています。これほどの人がいるのですから、利用者交流会で顔を合わせてみれば、その昔机を並べて勉強した同級生だったという喜ばしい発見もあります。その中から、今回は昭和十一年子年（丑年も含む）生まれの六人の方にお集まりいただき、「座談会―あんなこと、こんなこと」と称して、子どもの頃のくらし、町の様子など当時の思い出を賑やかに語っていただきました。

◆小学校入学―昭和十八年四月

中学校入学―昭和二十四年四月

〇まず自己紹介から



古田隆司さん 草風会（民謡） 昭和十八年に愛知県一宮市から転入。多摩製糸工場（旧森田製糸工場）の社宅に住まい。青白でノッポだったので「きゅうり」というあだ名だった。

野島陽三さん 熊川益裁愛好会 いたずら坊主でよく遊び回っていた。農協の前身の養鶏組合で父が事務をしていた関係で、そこが住まいだった。

黒米幸三さん 熟年ひろば 熊川村生まれ 四く五歳の時に日本橋に転居。戦時中は新

潟に疎開、終戦で熊川に戻る。小三から現在の二小に転入。少年時代には、漫画に熱中し作品を少年雑誌に投稿。福生中の五十年記念誌に、「漫画少年」という題の作文を寄せた。

三枝吉子さん 熟年ひろば 福生生まれ

中学の三年間はバレーボールクラブで活躍。他にも、西多摩連合運動会に毎年徒競走の選手として出場した。

細谷田利江さん 朗読の会ごんべり

白梅のほかにも松林、本館でも活動している。父親が海軍の軍人だったこともあり横須賀市で生まれた。小二のとき福生一小に転入。

野口尊雄さん 熟陶会 生まれてからずっと熊川に住んでいる。小学校時代は良い思い出は少なかった。家から持っていた農作物が給食に使われた。福生中の第五期生。

※皆さんの思い出の話の中に、地域の昔の様子を知る貴重な話が沢山詰まっています。いくつかご紹介いたします。

〇学校生活はいつだった？

給食 小四のときに給食が始まった。女子はジャガイモの皮を剥くなど給食作りを手伝っていた。米軍の缶詰もよく使われてい

た。二小では農家の子は食材を持参。給食費は払っていませんでした。一小では、教室をつぶして台所にしていました。外のカマドで火を焚いていた。



昭和22年

御真影と二宮金次郎の像 学校の行事の折に、御真影（昭和天皇の写真）が出されてた。二小では農家の子は食材を持参。給食費は払っていませんでした。一小では、教室をつぶして台所にしていました。外のカマドで火を焚いていた。

授業 一小も二小も午前と午後の二部授業。教科書は新聞紙くらいの大きさの紙に印刷したものを綴じて使っていた。兄弟のおつるを使用。二小では一年生（二クラス）だけは、熊川神社の境内にある二階建ての「青年クラブ」という建物を使って授業を受けていた。冷暖房設備もなく特に冬は厳しかった。

子どもたちは写真にお辞儀をした。顔を見てはいけない、お辞儀をするだけと言われた。校庭の一角に二宮金次郎の銅像があった。戦時中は供出したが戦後また復活した。

子どもの数 一小は一年生三クラス、二小は二クラスで一クラスの人数は四十〜五十人。

中学校ができた頃 現在の三小が新制中学校の校舎だった。中三のときに新しい福生中（現福生一中）ができて引越しの手伝いをした。机や椅子や黒板の運搬を一ヶ月くらいした。校庭の松林の中にコスモスの種をまいたことも懐かしい思い出。体育館も無かったので卒業式も外だった。（校舎と校舎の間）

修学旅行 二小の修学旅行は三学期の終業式が終わった後の寒い中、箱根にある師範学校の寮に泊った。中学の修学旅行は、奥日光の南間ホテルに泊った。夏の暑い時期のことで、持参したおにぎりは大丈夫だったけれど、いなり寿司は腐ったことを覚えている。塩は酔よりも強し。

白梅会館にプールがあった？ 白梅会館の場所は、当時はサツマイモ畑だった。その後、二小のプールができた。また運動会るとき徒競争のコースとして使用していた。（二小の運動場だけでは直線で百メートルがとれなかったから）